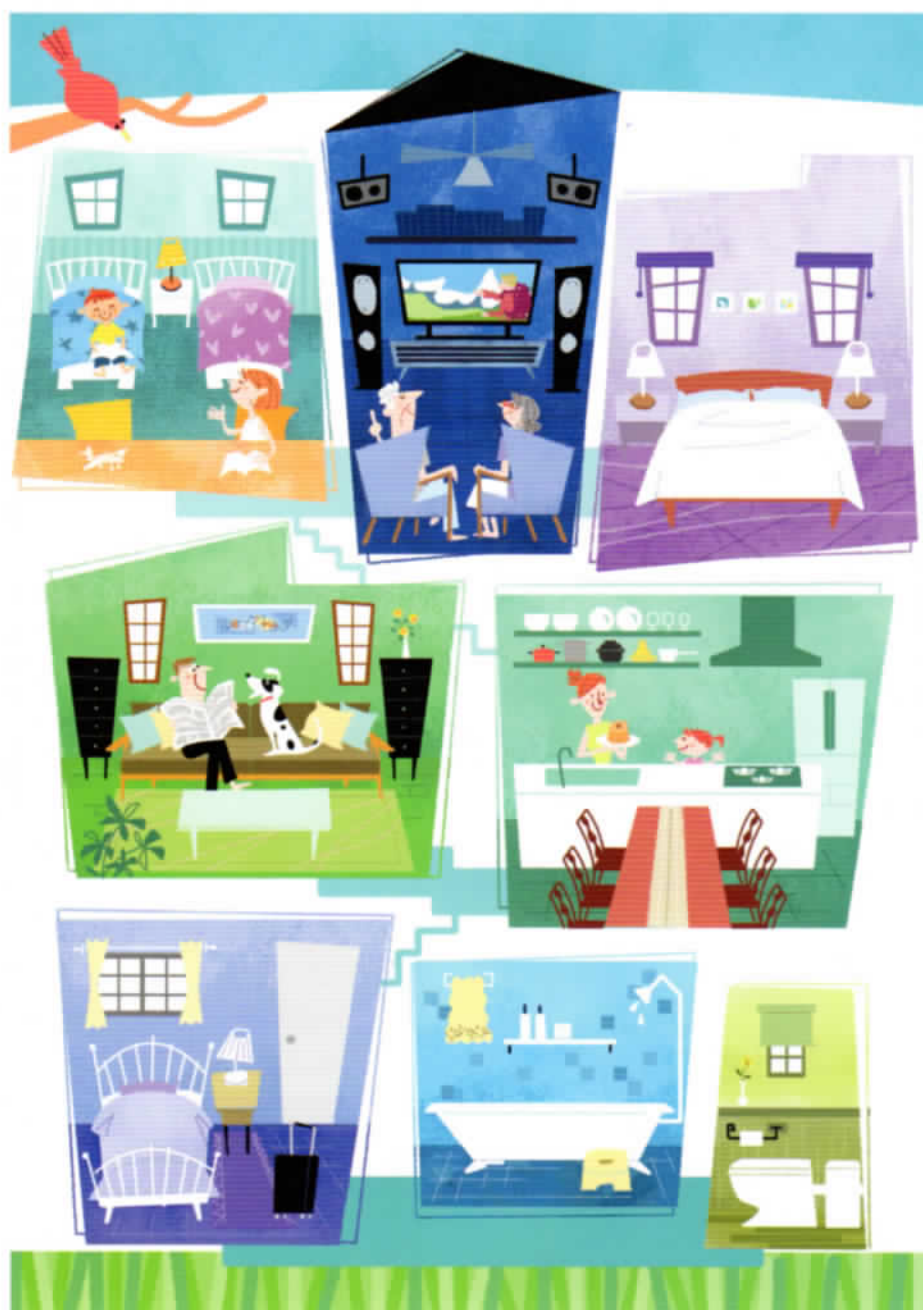


特集

心を豊かにする住まい

～趣味を通して、人と笑顔が集まる空間～





「革新」し続けることで
「伝統」をつなぐ

和傘職人 京和傘 株式会社日吉屋 竹澤幸代さん 松本光彩さん

幾何学模様を描く竹骨の構造と、手漉き和紙を透過して広がる柔らかな明かりは、贅沢な時間をもたらしてくれます。

インテリア照明「古都里KOTORI」は、創業以来、160年以上に渡り、和傘を作り続ける京和傘の老舗の株式会社日吉屋が2006年に発表。細くしなやかな竹骨のラインや、明かりを点けた際に和紙の上で織りなす光と陰影のコントラストの美しさなど、伝統的な和傘の技と美が活かされたものとなっています。

竹や木、そして和紙などの自然素材でできた和傘は、数十にもおよぶ作業工程があり、それぞれに複雑で、高度な技術が求められるのだそう。そのため竹骨職人、和紙職人、和傘職人などによって、江戸時代から分業制で製作が行われています。



「工程が多く、乾燥にも時間がかかるため、傘が完成するまで、3週間から1ヶ月程度かかります」と話すのは、同社の和傘職人・竹澤幸代さんと松本光彩（ひかる）さん。ともに、京都工芸大学校の竹工芸専攻の出身。「ものづくりは、昔から好きでしたが、オープンキャンパスで竹工芸の素晴らしさを知った。学校の先輩がこちらで働いていたこともあり、和傘職人になることを決めました」と、竹澤さん。「和傘は、イベントや祭事、茶事、そして歌舞伎などの小道具などでも使われています。ただ、日常使いのできる傘が欲しい」という注文は少ないですねと話します。

その話の通り、和傘の需要は年々減少し、全国的にも和傘を作り続けているところは、10数軒を残すのみ。こうした現状から、5代目当主であり、同社の代表取締役社長の西堀耕太郎さんは「もと暮らしの中で使ってもらえるものが作れないだろうか」、新商品の開発をスタートします。

竹骨の繊細な構造と、陽に透けた時の和紙が織りなす陰影のコントラストの美しさ。この伝統美を活かしながら、現在のライフスタイルにマッチするものは何か。思案の末、思いついたのが、照明のランブシェード（かき）にする、というアイデア。この西堀さんのアイデアをもとに生まれたのが、「古都里KOTORI」だったと言います。

西堀さんが掲げているのは、「伝統は革新の連続」。「伝統は、時代に応じて、常に革新するものだ」というのが社長の考え。和傘にしても、日本に伝来した当時は、現在のように閉じることができなかったと言います。身分の高い人々の間において、日よけとしてだけでなく、権威の象徴として、また、呪術的な魔よけのためなどに用いられていたのだとか。それがやがて、雨具として使われはじめ、安土・桃山時代に、開閉できるよう改良。江戸時代には、生活必需品として、庶民に広く普及するまでになりました。私たちも伝統の技を受け継ぐだけでなく、時代にマッチしたカタチにしていかなければ、と思えます。竹澤さん。「竹骨職人は、高齢の方も多く、引退してしまうと部材が手に入らなくなる可能性があります。今後部材を確保するため、これまで分業制であった工程を「貫して行う」ことを検討しています。ただ、手法を継承するだけでなく、時代の背景やニーズにあわせて、変化させていくことも大切なのではないのでしょうか」と、語ります。

技と心を受け継ぎながらも、新しく変化していくこと。伝統とは、ただカタチを残していくだけでなく、そのカタチを新たに創り出していくことなのかもしれない。「古都里KOTORI」の温かな光が、その未来を明るく照らしているかのようです。



- 1 和傘の伝統的な技術を用いたインテリア照明「古都里KOTORI」。お客さまのイメージに合わせて、オーダーメイドが可能。
- 2 3 「古都里KOTORI」と同じように、和傘の特徴を活かしたインテリア照明「MOTO」。傘の骨組みのような形で、リングを上下すれば、傘のように開閉可能。シーンにあわせて、形状を変化させることができます。
- 4 開くと蛇の目のような模様に見えることから、そう呼ばれるようになった「蛇の目傘」。現在では、色染めた竹で作られた骨組みと高級手漉き和紙などを使った、装飾の美しい和傘を総称として「蛇の目傘」と呼ぶと言います。
- 5 和紙に透ける陽の光と影が織りなすコントラストの美しさが、「古都里KOTORI」を開発するきっかけにつながったと言います。
- 6 「骨上塗り（傘の骨部分を保護するための塗り）」を行う竹澤さん。
- 7 「軒紙貼り（傘の外周に紙を貼り、傘全体の大きな貼り作業前に行うもの）」を行う松本さん。
- 8 「古都里KOTORI」のランブシェードは、和傘のように折りたためるので、季節ごとに取り替える際など、コンパクトに収納することができます。
- 9 和傘と同様に、一つ一つ手作業で作られる「古都里KOTORI」。竹骨の上に、和紙を貼る「胴張り」も丁寧な作業が求められます。

京和傘 株式会社日吉屋

江戸時代後期に初代当主墨藏が京都・五条本覚寺周辺に傘店を構えたことに始まる。現在では京都で唯一残る和傘製造元で、五代目耕太郎が筆頭に伝統の技を受け継ぎ、老舗の看板を守り続ける。京都で作られる和傘は「京和傘」と呼ばれ、京情緒豊かな優れた伝統工芸品として愛好され、茶道家や御用達の本式野点傘や、祇園の舞妓さん達が愛用する蛇の目傘などで知られる。

【問合せ先】

URL:<http://www.wagasa.com/>

E-mail:info@wagasa.com

